



TITLE:

静脩 Vol. 3 No. 5 (1966.12) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 3 No. 5 (1966.12) [全文]. 静脩 1966, 3(5)

ISSUE DATE:

1966-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65916>

RIGHT:

法 律 図 書 館

道 田 信 一 郎

静脩も号を重ねるうちに、図書館制度の在り方について、随分と情報を積み上げられたように思われる。アメリカの医学図書館、アメリカの図書館の電子計算機と電子回路網の利用策、英米仏の数学書コレクション、学者の養成所でもあるフランスの図書館のお話など、私としても興味深く読ませていただいた。そこへ、はからずも静脩執筆の依頼をうけたので、私の分野での外国の図書館のことを、一番よく知っているハーバード大学とミシガン大学についてのべてみることにしたい。

私は四度欧米に出張したが、最初は、1954年にハーバード大学ロー・スクールに留学した。ハーバードの大学図書館の大きくて立派なことはよく知られている。しかし、法律図書館、ロー・ライブラリーは、この中央図書館とは別に設置されている。向うに着いて感心したことは、まず第一に、図書館がいわゆるセントラル・スタック方式に出来ていることだった。真中に書庫があって、そのまわりを各階研究室がとりかこんでいる。本学の法経図書室のように、書庫が建物を異にして幾室にも分散しているというようなことはなかった。セントラル・スタック方式は、教官にも便利きわまりないが、また、図書館事務の合理化にも最良の方式のように思われた。昭和8年の京大事件で退官された当時の法学部長、英法講座担当の宮本英雄教授が1910年代にハーバードに留学されたときも、このセントラル・スタック方式に感心したと話して下さったことがあるので、また40年後に私が同じことで感心したことになる。今からは、また12年も前のことになるが、学生図書室は、中央書庫の上にのっかった形で出来ていた。エレベーターが真下の書庫へと続いていた。部室の四周は全部開放式の書架で、各大学の機関雑誌などは学生用に7部づつ備えつけられていた。大きな、大きな部屋で、見事なものであった。この図書館は、毎夜11時まで学生でいっぱいであった。学園が、その本来の意味で、夕食後からも活気にあふれていることは、素晴らしいことであった。法律図書館の隣にある学生集会所の食堂では、夜9時頃から12時までは、ビールも販売していた。夜11時まで図書館で勉強して頭に血がのぼった学生たちは、ここで暫く頭を冷していた。学生集会所の隣には、学生寄宿舍があるが、部屋の灯は、1時、2時まで消えない。

ミシガン大学のロー・スクールの学生図書室は、中央書庫の横にひっつけられた形に出来ている。書庫を中心に、研究室は地下2階、地上7階にわたって配置されている。この横にひっついた形の学生図書室は、天井まで吹き抜けて、地上7階分の空間をゆっくりとかかえている。明り窓はステンド・グラスで、各国、各地の著名大学の紋章をちりばめている。日本の大学の紋章は入っていない。夜の照明は、天井から下ってきている燭台にちりばめられた電球で行なわれていた。まるで、壮大な寺院に入った感じがする。私は今年の1月から4月

までの冬学期の間、この大学で客員教授として正規の講義を単独で担当した。ハーバードもそうだが、ミシガンも、京都にくらべると、ぐっと緯度が上になる。私の授業時間は、真昼の、いわゆるゴールデン・アワーに組みこまれていたが、私は毎朝暗いうちから大学で仕事をしていた。授業の第1時間目は午前8時、まだ真暗で、夜のようにであった。学生たちは、夜のうちから働いている、という感じてであった。しかし、教室からも隣、図書館からも隣の学校の食堂では、午前7時から朝食の用意ができていた。そうしたところで私は、図書館のことだけでなく、朝8時からの授業に集りの悪い本学の法学部学生諸君のこと、日本での食堂の不備、住宅事情・交通事情の悪さ、授業時間の長いことなど、いろいろと思いをめぐらしてもいた。京都で、第1時間目の授業に出席すると、朝食が出来ないと訴えていた学生諸君の顔なども思い浮かべた。ハーバードやミシガンの授業は、1時間単位であった。学生たちは、図書館や教室の隣りや、学校の近くに住んでいた。ハーバードのあるケンブリッジ市にしても、ミシガンのアナーバー市にしても、学校中心の学園都市で、京都あるいは京阪神のような大都市ではなかった。授業時間が1時間制ともなれば、朝食が出来ないなどということはおよそありえない。京都のことは、一体何から手をつけて行くべきか、ミシガンで私は毎朝教室へ、図書館へ向う学生たちに出会うたびに考えさせられたものだった。

ミシガンでは、随分と前から、夏学期制度がとられていた。学年は、9月中旬にスタートして12月で秋学期は終り。1月から4月までが冬学期、5月は試験と卒業式。6月中旬から8月中旬までが夏学期で、比較的授業時間を集中して、8つか、9つの講義が学期中に終了している。湿気こそ少いが、アナーバーの夏は温度では京都に劣らず高い。そうした中で、教官も学生も、よく働いている。しかし、教授にとっては、図書館のサービス、司書のサービスが不可欠、最上の支えであろう。書庫から本や資料をとり出してきても、本学のよう、「図書借用証」というものを一々作成する手間にはぶかれている。本年6月の静脩に「学術文献の洪水」対策が掲載されているが、洪水のような文献資料を対象にしなければならぬ今日の学術研究実施の上からは、この制度は合理性をもつ。ミシガンでもハーバードでも、借用証は、専門の図書館員（あるいはアルバイト学生）が毎日研究室を巡回して作成・ファイルしている。図書の返却は、カードを逆にする合図によつて行なわれている。

私としては、なんとかして、セントラル・スタック方式の図書館を、本学でも建てたいものだと思っている。（法学部教授）

#### 国会図書館長と大学図書館長との懇談会 一於楽友会館一

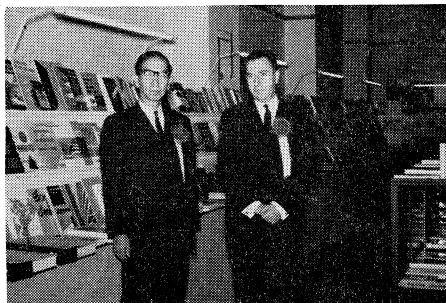
昨年より東京地区で開催されていたこの懇談会は、11月8日はじめて近畿地区で開催された。近畿地区の国公立大学のほかに西日本地区の私立大学の参加もあり盛会であった。

東京大学伊藤館長の司会のもとに、まずこの会の発足以来の経過が詳しく述べられ、ついで河野国会図書館長より国会図書館の組織、業務の紹介がなされた後、懇談に入る。懇談の段階では、国会図書館と大学図書館の連絡提携の緊密化を目標に、国会図書館のサービスの現状と問題点を中心テーマとして、質疑応答が展開された。国会図書館を通じて行なう国際交換の相手国を現在の13カ国以外にも拡げられたいこと、およびその業務のスピードアップ、文書による一般参考事務の回答のスピード化などが要望されたのに対し、国会側からは、その現状が説明され、今後の善処について大学側の協力が求められた。このほか官庁出版物、図書館業務の機械化、視聴覚資料などについても意見の交換があり、今後も国会図書館と大学図書館との提携協力の必要が確認された。なお来年度も近畿地区で開催され、立命館大学を中心に計画が進められることになった。

## 現代フランス書籍展開催

去る11月18日より12月3日まで、関西日仏学館と本館との共催で、現代フランスのあらゆる領域にわたる新刊図書5,000余点が、下記4会場に分けて展示された。本館では、会場いっぱい約3,000点の学術書がならべられ、初日の10時には、関係者多数参加のうちに、関西日仏学館のルクレール館長と、本館の宍戸館長とによって、開会のテープが切られた。連日来場者多く盛会であった。

人文、社会、工学、理学、農学関係  
約3,000点 於附属図書館陳列室  
文学、語学関係 約1,500点  
\* 於関西日仏学館  
医学、薬学関係 約 100点  
11月21日～26日 於本学医学図書館  
美術関係 約500点  
11月18日～27日 於京都書院



## —— 資料紹介 ——

### ○ World List of Scientific Periodicals Published in the Years, 1900~1960. 4. ed. Lond., 1963.

- v. 1 : A-E (1~18907) xxv, 532p.
- v. 2 : F-P (18908~41404) xx, 533~1186p.
- v. 3 : Q-Z (41405~59961) xxii, 1187~1824p.

(1900年から1960年における世界の自然科学雑誌のファインディングリスト)

これは3巻から成り、1900年から1960年までの間に世界において出版された自然科学および工学関係の逐次刊行物のうち、英国国内の大学、研究機関等に所蔵されているもの、また所蔵されていないが書名だけ判明しているもの、これらを書名のアルファベット順に収録したファインディング・リストである。約60,000タイトル収録され、特に1951年から1960年までの10年間のものが全タイトルの約1/4を占めている。

1) 書名、2) 発行者、3) 出版地、4) 1)の書名の省略したもの\*、5) 所蔵機関および所蔵している刊年の順に記載され、タイトルには一連の番号が附され、その番号によって前後参照出来る。\* (省略書名は現在英国において用意されつつある British Standard for the Abbreviation of Titles of Periodicals に従っている)

第3巻の巻末には主題のアルファベット順による国際会議をリストし、開催地、開催年、会議の略名、議事録の所在機関など加えてあり、正式の国際会議名による索引も附している。

注目されることは、このファインディングリストは一応3巻で完結しているが National Central Library との協定により1960年以後の新しい出版物については British Union Catalogue of Periodicals (BUCOP) に補遺として継続されることになったことである。次にその (BUCOP) について述べよう。

### ○ British Union Catalogue of Periodicals in Corporating World List of Scientific Periodicals, edited for the National Central Library. 1965. 233, viip.

(1960年から1965年における英国所在逐次刊行物総合目録)

これは前述の World List of Scientific Periodicals (WLSP) の補遺的性格をもつ1960年から1965年における雑誌総合目録である。(WLSP) と異なる点は、収録されている分野が自然科学のみならず人文、社会科学にまでおよんだことであり、その範囲は英国国内の大学および研究機関に所蔵されているものに限られたことである。編者、発行者による索引にはその出版物、また、所蔵機関索引には住所の他に簡単だが略記号で貸出の可否、利用者の範囲などが附され、この目録の利用者への便宜がはかられている。

速報的に年4分冊の形式で発行され、それが5年毎に1巻にまとめられている。現在附属図書館には、分冊の1965 (No. 1~4)、1966 (No. 1, 2)、および1960年から1965年までをまとめた1巻がある。

## 附属図書館のあり方

○

前田 昇 三

おとなりの台所の様子を、比較的良好に理解しているものが、編集者の依頼とはいえ、「要望」として次の事々をお願いするのはよくよくのことである。ぜひ手じかなものから実現のために積極的な努力をしていただきたいものである。

その一つは、部局図書室で受入事務を終えた図書資料は附属図書館に持ち込まれ、附属図書館としての整理業務が行なわれているが、その整理に要する日数は、数旬を必要とするらしいが、学術情報の迅速化が叫ばれている昨今、図書整理期間の短縮化を願い、本館としての機能を十二分に果たして、利用者に迅速、適確な情報を伝達する業務を拡大されることを要望します。

つぎに、研究者がときたま必要とする辞書、辞典等のすべてを所属機関で整備することは種々の困難をとまらう。このような参考図書を附属図書館で、できうる限り多様に収集することを、附属図書館業務の一つの柱とされることを望みます。なお、所蔵参考図書の目録の編集・出版をはかり、既存の参考図書が十二分に利用できうるようにしていただければとても便利と考えます。

もう一つのお願いは、附属図書館で月々到着する図書資料、また新しく受入された雑誌についてのインフォメーションを考えていただきたい。できれば“静脩”の一部として新着図書・資料、雑誌欄を編集して、案内するのも一案かと思えます。

このような「要望」をかなえていただくには、人手不足とか予算僅少等がネックになることと考えますが、「要望」の一つ一つは附属図書館での大切な仕事ではないかと思われますのでこれらがぜひとも実現されることを期待します。

(経済研助手)

○

沢 居 紀 充

次のような意味でネット・ワークの中心としての仕事を進めてほしい。

### I. <図書館学の研究組織の中心として>

図書館学研究室を設置し、

- ①部局図書室間の整理・奉仕にわたる技術进行交流し開発する。
- ②技術的な提案、学問的な研究、それらを実際に生かすシステムを作るための運動の拠点となる研究誌の発行。
- ③図書館学資料の core collection を充実させる。
- ④図書館員自身が、図書館員自身のためにインフォメーション・サービスを実験し、得られた成果を各部局で応用する。

### II. <文献の相互利用の中心として>

- ①全学の蔵書構成を明らかにする。
- ②ユニオン・カタログ(カード)室に専任の職員を置き利用案内を充実する。
- ③冊子目録の刊行、受入目録の収集、刊行。

### III. <情報奉仕の中心として>

- ①一般参考図書を系統立てて収集する。
- ②各部局図書室で subject bibliography を調製するための援助を行なう。

具体的な要望はたくさんあるが、今最も必要なことは、学内の図書館員相互のパイプの通じをよくして、仕事や蔵書や情報に至る道筋を常に風通しのよいものに保つ上で本館がリーダーシップをとって、諸提案が速かに実現されるように各方面へ働きかける組織の中心となることである。この点から、図書館学研究室の設置を特に望みたい。これが無理なら各部局で予算を分担し、図書館学の core journal を収集し、記事索引を作成することなどを通じて、研究室の設置にまで至る活動を組織することからでも始めていただきたい。

(経済学部図書室)

○

A. K.

附属図書館の部局図書の登録、整理事務に追われている現状を見て、登録のあり方と併せて中央集権化を急ぐ附属図書館のあり方を考え直して見たい。附属図書館の受入掛から週1回ぐらい各部局へ登録に必要なものを持って出張するとか、時間と手間を出来るだけはぶくよう考えてほしい。現在附属図書館が果している役目、登録と全学の図書カード検索が出来るということに重点を置き、事務範囲を縮少してはどうか。つまり、図書

カードの検索とそれを助ける参考掛と受入掛と、貴重書あるいは dead book の所蔵、保管、閲覧に限ってはどうか。(教養部図書室)

○ 中 本 誼

一般に図書館という所は、ひんやりしてどこか殺風景で、外の世界と、きっぱり離れているようです。でも、ぼくの高等学校の図書室の窓ぎわは、庭に面していて、僕の一番好きな所でした。春は、新緑や蝶に目を休め、秋は、金木犀の香と、自然界に面していたからです。本学の図書館も、もっと自然を取り入れてはどうでしょう。そうすれば、他では、味わえない楽しさができて、一層すばらしいものに、なるのではないのでしょうか。

(理学部2回生)

○

附属図書館は数多くの困難な問題をかかえている。図書館への期待と批判の声はしばしばきか

れるが、それに対する改善には従来から本館としてもできるだけの努力はして来たとし、今後もしようとしている。しかし仕事量の著しい増大に比し、人員の過少と財政面の窮乏は大きな障害となって図書館にのしかかっている。曲がり角にきている本館のあり方についてよせられた数々の意見は、至極もつともと思われる。本館としてもこれにこたえるため、種々の制約はあるが、環境の整備や情報活動も、可能なことから一つずつでも実現したい。しかしながら素手では結局縫策に終るのを憂える。知識のソースだといわれながら、それほど重視されていない図書館、改善への努力は図書館にのみ負わされてきたが、あるべき姿の京都大学図書館の実現は、単に図書館だけの努力で達成できるものとは考えられない。館員として一層の努力を惜しまぬとともに、背後に大学当局はもとより、全学の各層の深い理解と支援を期待する。(編集部)

○ 「富士川文庫・本草関係図書」医学図書館および薬学部図書室へ移される

久しく本館に所蔵していた標記図書は、医学関係の図書は医学図書館へとの趣旨と、当該部局の要望に基づいて、今回それぞれへ移された。富士川文庫 9,017冊は医博、文博故富士川游氏の旧蔵書で、大正7年本館に寄贈された医学史関係の豊富な資料である。日本医学史の著者富士川博士の面目をしのぶと共に、和漢医学および日本医学史研究に不可欠のものとして、ひろく学外にも知られその利用も多い。医学図書館では来たるべき利用に備えて、整理、配架など準備に多忙である。

本草関係図書 2,043冊は本学農学部教授故菊池秋雄博士の旧蔵書がその大部分を占めている。これは他の園芸、植物などに関する多量の蔵書と共に、昭和29年以来本館に収蔵されていたが、今回薬学部図書充実のために本草関係のものが移動された。同図書室ではすでに配架を完了し利用を待っている。ちなみに菊池博士が和梨(二十世紀)の品種改良育成に貢献されたことはよく人の知るところである。

○ フランス学位論文到着

パリ大学と本学との間の交換図書として、自然科学系を主とする(希望により法・文系も可)学位論文が、1959年より年1回定期的に150~200冊ずつ送られてくる。今年度は去る11月、Paris, Lyon, Strasbourg, Lille, Grenoble, Poitiers, Dijon, Besançon, France 9大学の論文205冊が到着、関係部局へ分配された。その内訳は次の通り。

理 47, 法 28, 医 24, 経 9, 農 1, 化研 27, 日本物理化学研究会 69.

○ 本館所蔵資料の掲載書寄贈される一「甲子兵燹図・天王山十七士忠死之図」一

この二つの図は尊攘堂遺品として、本館に所蔵する維新史料である。去る11月世界文化社刊行の日本歴史シリーズ17「開国と攘夷」(P. 29, P. 55)中に挿図として掲載されたので、その1本が同社より本館へ寄贈された。このように本館資料を利用しての出版物は、寄贈されるたてまえになっているので、今後そのつど紹介することとしたい。



### 文学部図書室

明治39年9月、文科大学が開設されて以来60年、24講座から現在39講座に増加し、収集された蔵書は、昭和41年現在、洋書23万余冊、和書約24万冊計47万余冊と学内随一の多数に達している。その中には、内田、桑原、池田、クラーク、尾崎、米田、田中、須原、岡嶋、朝永、西田、金倉、今西、鈴木、狩野、田辺等々諸先生方の研究に寄与した貴重な蔵書が、それぞれ文庫として収蔵されている。

図書室は、図書整理室および哲学科、文学科、史学科の三つの書庫とそれぞれの閲覧室を有し、書庫は研究上の便宜を考え、接架開放式をとり、本学部の教官、学生は自由に書庫に入って図書を検索することが出来る。

カード目録は、洋書は著者名、和書は書名を主とした目録を備え、哲学科閲覧室には文学部全体の総合目録がある。また学部図書館員の努力の結果、昭和23年からは、NDCによる分類目録を備え、冊子目録(図書月報および特殊文庫目録)も作成している。

このような歴史と伝統をうけついで来た図書室も、時の流れと共に様々な問題が起きて来ている。

第一に、昨年新築されて近代化した史学科を除いて、書庫の建物が大正初年のままで、通風、採光共に悪く、殊に未だ白熱灯を使用しているため、書架のぎっしりつま

った書庫内は検索にも差支える程の暗さであり、また満腹状態の書庫に年々増加する図書を収蔵するスペースにも掛員は頭を痛めている。場所の狭あいは書庫のみにとどまらず、図書掛員23名(定員16名、非常勤7名)の大所帯を擁する整理室も、これ以上は書架1台、机一つもふやせないぎりぎりの状態であり、また雑誌類を各研究室に分散収蔵しているため、利用に甚だ不便を訴える声が多く、雑誌室の設置が強く望まれているが、これも場所の無い関係で不可能に近い。また現人員を以てしても、年々1万数千冊におよぶ増加図書の受入、整理、書庫の整備に迫られて、研究図書館としての重要業務である参考事務にまではとうてい手が回りかねているような現況である。図書館の近代化、業務の機械化等が問題になっているが、現在では掛員一同の努力にもかかわらず、受入れた図書の印刷カードがカード箱に挿入される迄には約1年から1年半を要するような状態では、近代化、機械化もほど遠いと言わねばならない。以上のような種々の問題をかかえながらも何とかして少しずつでも解決に努力し、どうすればより一層迅速に図書を利用出来るようにするかが、研究と教育を支える陰の力として働く図書室の使命であり、課せられた今後の問題であろう。



**あとがき** 1966年もあとわずか。お正月を郷里でむかえようとか、冬山へとか楽しい計画をたてていらっしゃると思います。

皆様方との Communication の場としての館報もよりよいものにするため、編集員一同、計画をたて、奮闘して来ましたがまだまだ問題点はあります。

皆様方のきたんなき、ご意見・ご感想をどしどしお寄せ下さい。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 3, No. 5 (通巻13号) 1966年12月20日発行・発行人岩猿敏生  
発行所 京都大学附属図書館 京都市左京区吉田本町 電代表77-8111 (内線) 2220-2238